

(織田武雄)

第二回暹羅國經濟調査報告

アンドルース編

Stamm:

2 nd. rural economic survey, 1934-1935.

by J. M. Andrews

一九三一年暹羅國政府は經濟政策の根本策を樹立する爲に第一回田園經濟調査を行つた、チンメルマン氏の手によつて送られたその報告はこの國經濟の様相を明にする所鮮少なからざるものがあつた。田園經濟調査といふはこの國の經濟發展段階を示すもので暹羅國生産活動の全面的檢討を行ふものに他ならぬ。

第二回調査はアンドルース氏の指導下に政府並にハーヴァード大學の協力により一九三四年より三五年にわたつて行はれたものこの經濟調査とともに衛生方面の病歴調査、人類學的計測、土壤の化學的細菌學的調査が同時に行はれて、夫々獨立の報告書をなしてゐることに注意しておく。

調査法は前回のものを踏襲してゐるわけであるが、budgetary method と稱して現金收入及支出によつて一家一年間の豫算表ともいふべきものを調査者が質問によつて得たる所によつて作製する。被調査家庭が事實を隠蔽せざる様の配慮は調査法のうちに周到に盛込まれてゐて、約一千七百家族について調査が行はれた。調査對象に選ばれた村落は四十一、北東、南、北、中央、南東の

する必要もないであらうが、本書は彼女が「プチ・パリジアン」特派員として東洋に來遊した歸途に行つた、北京から青海や新疆を経てカシミールに至るまでの大陸横斷旅行に於ける印象や見聞を書き記したものであつて、彼女と行を共にした「タイムス」特派員 Peter Flemming も亦その旅行記を News from Tartary, 1936 と題して出版して居る。併しフレミングの旅行記が多く政治問題と論じて居ると異つて、マイアールの旅行記は如何にも女らしい温かな筆致を以て、西北邊疆の特異な風物や生活が彼女の高い知性を通じて我々に物語られて居るのみならず、彼女のジャーナリストとしての鋭い才能は、この祕境に絶間ない動亂の數多のホットニュースをも傳へて居る。要するに本書が旅行記として極めて興味深きものであり、報告文學としても價值高きものであることは疑ひないが、それだけ翻譯には難物であらう。然るに多賀義彦氏の多大の苦心によつて、所謂翻譯物とは感じられないまでに完全な邦語にこなされて居るのであつて、恐らくその生彩ある筆は原書にも勝るものであらう。たゞ多賀氏も附記されて居る如くローマ字綴りの中國人名を復原することは甚だ困難なことであるが本書の中のその二三に就いて私見を記すならば、馬仲英の通稱カスリンは葛思靈でなく「小司令」の意味の次司令であり、新疆前主席ヤンツォンシンは楊晉璽ではなく楊增新であり、馬仲英の部下の馬英學は馬英彪、馬何三は馬虎三ではないかと思はれる。またツンアンやオボなども支那回教徒や道標と意譯されずに東干、鄂博とさるべきであらう。(四六九頁、創元社發行、定價貳圓)

五地域に遑羅を區分し、各地域の特質に従つてその平均的情態を推知するに足る村落が選ばれてゐるわけである。

三百九十六頁のこの報告には統計は適宜に整理簡略されたものが比較的少數掲載され、この調査によつて觀察された遑羅國經濟の特質、その缺陷と對策に關する論述が大部分をなしてゐるのもこの調査元來の目的に従ふ所であらうが、老成なる統計數値の提示に終らず通讀して唯に經濟のみならず遑羅國の姿を極めて明瞭に理解せしめる。

首都盤谷を含む中央部以外シヤム人は殆ど悉く自給自足の食料生産を出でんとせざる無智怠惰の農民といふ有様にて、商業的活動は彼等の殆ど全く理解せぬ所であるらしい。經濟上支那人の支配する所となつてゐるのも又止むを得ぬ所で、遑羅の獨立はシヤム人が自らの手で商業の支配權を支那人の手より奪回する時に始めて完成されることになる。この意味よりすれば、改良農具の採用をも俄に行はぬ農民シヤム人が商業的訓練より始めて華僑勢力の排除に至るは極めて前途遠しとせねばならぬ。米が僅に輸出農産として名を馳せてゐるのも、それが長期保存に耐へることによつてゐるもので、シヤム農業をして自給自足、物々交換の現況より脱せしむる爲には先づ鋪裝路の築成から着手せねばならぬといふ有様である。

本書はシヤム開發の根本策を提供する重要な資料となるのであらうが、調査方法とその示唆する開發策は我々にとつても極めて参考となる所多いものであらう。(野間三郎)

雪

中谷宇吉郎著

日本海に面する北陸から北海道にかけての地方は、冬季の季節風が多量の雪を齎らすため、多雪地域としては世界的にも有數の地方である。即ち降雪は單に氣温の低いだけでは起らないのであるから、シベリヤ地方などでは雪は普通考へられて居るほど決して多くはないのであつて、我國の多雪地域と比肩し得るのは、アラスカやカナダの太平洋斜面の地方位であらう。斯の如く日本海沿岸では積雪に富むため、雪は農業、交通、住居など生活のあらゆる方面と深い關係を持つて居るのであつて、雪の一年間に與へる災害だけでも、鐵道の損害を除外して、なほ七千萬圓乃至一億三千萬圓ほどの巨額に達すると云はれて居る。それにも拘らず我國では、雪と住民の生活に關する研究などは從來殆ど闕却されて居た爲め、鈴木牧之の「北越雪譜」の如き古典的なものを除けば、この方面の文獻は全く見當らないほどの状態であつた。併し漸く近年農林省管轄の下に「積雪地方農村經濟調査所」が設けられ、或はそれに應じて雪の科學的研究が各方面から注目され始めて來たのであるが、斯る機會に岩波新書が中谷宇吉郎博士の「雪」を加へ得たことは非常に喜ばしいことである。本書は勿論専門書ではなく雪に關する科學的興味を一般に喚起するために書かれたもので「雪と人生」「雪の結晶雜話」「北海道に於ける雪の研究の話」「雪を作る話」の四章に分けられて居るが、本書を通讀することによ